

フロイト、ラカンとコンプライアンス——

「要求」と「機知」、その応用事例（SNS 誹謗中傷、蛙化現象、「主語がデカイ」 etc.）

清田友則

Freudo-Lacanian Compliance:

Demand and Jokes, and their Case Examples (Online Slander, ICK, Sweeping Statement, etc.)

KIYOTA Tomonori

タレント ryuchell の自殺報道で現在沸騰中の SNS の誹謗中傷問題だが、¹ 今回のケースは、彼自身、当事者として積極的に発信してきたこともあって、メディアやネットの反応はいつになく冷静で、従来のような不必要な煽りや形だけの人権啓発は影をひそめた。議論に真剣さが増すことで、問題がいかに深刻で解決が難しいかを悟るきっかけとなったのは皮肉といえれば皮肉だが、ようやくこれで本格的な議論がスタートするのだと思えば、それはそれで大きな収穫である。

そんななか、たまたまネットでみつけた経済学者・成田悠輔の以下のコメントは、誹謗中傷問題の構造を読み解くうえで筆者が重要と考えるラカンの鏡像段階と、その理論的親戚筋にあたるマルクスの価値形態論をどことなく彷彿させるものがあって、ワイドショー向けのカジュアルな発言ながら思わぬ知的興奮を覚えた——、

誹謗中傷するほうは物凄く簡単にできちゃう。けれど、された側はそれに対応しようとする時間もお金もストレスもかかる。コストが大きすぎる。だからする側とされる側のコストの大きさの違いが根本原因だと思う。ちょっとやそつとで解決するのは難しいんじゃないかなって気が正直する。²

いっけん何の変哲もない文章だが、議論の内容ではなく形式に着目して読むと意義が変わってくる。どうということか。

誹謗中傷する側とされる側を不等号“<”の関係（「コストの大きさの違い」）としてあつかうのが内容だとすれば、形式は、等号“=”の関係、すなわち、“誹謗中傷することで得る快感” = “誹謗中傷されることで受けるダメージ”である。そもそも快感とダメージはたがいに異質なものであり、両者に直接の因果関係はない。加害者もこのことは充分承知しており、でなければ侮辱罪で告訴されるリスクを犯してまで快感を獲ようとは思わないはずだ。それでも誹謗中傷が後を絶たないのは——ここがただの価値論ではなく、価値形態論である所以だが——内容レベルでは承知していても、形式レベルでは承知できないからだ。

価値論（内容）では“意味”が問われるのに対し、価値形態論（形式）では“価値”が問われる。成田が十代の頃、大きな影響を受けたとされる柄谷行人は、著書『マルクスとその可能性の中心』のなかで、「価値について考えていくと、ある二つの異質なものが等価であるという根拠はなにか、という問いに行きあたらずにはいない」³と論じ、内容、形式の二つの側面からラディカルに探求した先駆者としてニーチェを挙げる。

まずは内容レベル——、

「たとえば、ニーチェの《^{シュルツ}負い目》というあの道德上の主要概念は、《^{シュルデン}負債》というきわめて物質的な概念に由来している」と、ニーチェはいつている。＜中略＞俺があつあの男を憎むのは、あいつは俺に親切なのに俺はあいつひどい仕打ちをしたからだ、とドストエフスキーの作中人物はいつ。これは金を借りて返せない者が貸主を憎むこととちがいはない。つまり、罪の意識は債務感であり、憎悪はその打ち消しであるといふのがニーチェの考へである。⁴

《^{シュルツ}負い目》の由来が《^{シュルデン}負債》であることにニーチェがあえて着目するのは、二つがあきらかな語源的つながりを持つにもかかわらず忘却されてきたからだが、ただ、これだけではまだ内容（意味）レベルを越えない。ニーチェが着目するのはむしろ形式レベルのほうで、そこでは、「情念の諸形態」と「物質的な概念」が本来まったく別のカテゴリーに属すにもかかわらず、由来（語源）によって意味と紐づけされ、その結果、「異質なものゝ等価にする転倒」が起きてしまう。

ちなみにここでいつ「等価」とは、共通の価値基準をもとに同質なものゝ変へ、柄谷の言葉を借りると、自明のこととして受け入れる」ことである――、

たとえば、人間は平等であるといふ思想は、さまざまの異質な人間が等価であるといふことだ。われわれはこれを自明のこととして受け入れるか、もしくはそれを“自然”の名において否定する。しかし、ニーチェの考へがすぐれているのは、もともと等価であるとも不等価であるともいつわないで、むしろ等価であるとはどういふことなのかといふ根本的な問いから出発した点である。⁵

「根本的な問いから（の）出発」とは、問いの枠組みじたい（形式）に疑いを持つことである。とはいへ、最初から目に見えるかたちで枠組みが存在しているわけではなく、形式のほうゝより根本的だからといつて、内容を飛ばしていきなり形式に向かうことはできない。その意味では、「出発」といつより、紆余曲折を経て根本的な問いに“たどり着く”といふべきかもしれない。

成田のコスト概念についてはどうだろうか。あれほど絶賛していついてこいつのもなんだが、氏が「根本的な問いに行き着」けたかどうかは、正直、微妙なところである。確かに、コストの「物質」性に着目することで、世に流布する「情緒」にまみれた諸概念――SNSの匿名性、歪んだ承認欲求、集団心理/同調圧力、ストレスのはげ口、嫉妬、等々――から一定の距離を置こうとする姿勢は評価できるが、形式にまで踏み込めたかといふと疑問が残る。

もつとも、これは成田個人の問題といふより、TVコメンテーターとしての制約によるところが大きい。ただでさえポリコレ・コンプラの圧力が強まるなか、“平等とはそもそもどういふことなのでしょう？”などと大上段に煽つたところゝ、良くて黙殺、悪くて“おまえは平等にケチをつける気か！”と炎上するのがオチである。ただ、本稿の体裁上、別の切り口から入るわけにもいつかないので、とりあへずはニーチェが立てた問いを今日の“不適切な問い”の文脈のなかに置き換へてみることで、議論を進めていつたい。

もとをたどれば等価原理までさかのぼる概念は意外と多い。平等、対等、公正、貸借、甲乙、正義、罪と罰、因果応報、結婚、等々、社会秩序の維持になくなくてはならない重要な概念ばかりだが、個別に見ていつくと、“よりによつてなぜこのふたつが等価なのか？”と疑問に思へるものも多い。たとえば小倉千加子は「結婚はカネとカオの交換」と定義するが、⁶ 笑い話のようにみえて、じつは最後の決め手にこれらを

選んだ男女は少なくないはずだ。ただ、重要なのはそこではなく、この等式の本質は、交換対象が何であれ、甲乙それぞれがたがいに別のモノを差し出さなければ等価関係が成立しない（カネとカネや、カオとカオの交換であってはならない）ところにある。

ニーチェによれば、「すべての概念は、等しからざるものを等置することによって発生する」。⁷そこでこの等式をひとつの定型文として見ていくと、まず気になるのが主語と目的語（述語）の可逆的配置である。等価であるということは、“A=B”を“B=A”にひっくり返しても意味は同じなわけだから、主語と目的語を入れ替えてもよいということになる。“男は女をカオで選ぶ”という文と“女は男をカネで選ぶ”という文は、もともとは相互に無関係の行為だったかもしれないが、結婚という概念が間に入ることで互いを意識するようになり、それまではたまたまカオで選んでいただけの男性も、いつしか結婚するならカオと順序が逆転し、カオに見合うだけのカネを稼ごうと人生設計を考えるようになる。

ただ、その際どういう物差しで釣り合いが測られるのかは、実はどちらにとっても謎で、相手を選んだ理由については説明できても、相手から選ばれた理由については説明できない。その結果、相手の一番肝心な部分を理解できない者どうしが、結婚という仲介概念だけで結ばれるという、なんとも心もとない関係が構築されるわけだが、くわえて別の副作用もある。“選ばれる”という受動性が甲乙どちらにも欠けているため、コミュニケーションの根幹を成す“攻め”と“受け”の相互作用が起きず、“攻め”と“攻め”が不毛に衝突してしまうのである。たとえば今年（2023年）の高校生の流行語一位にも選ばれ、話題となった「蛙化現象」の構造的要因も、筆者の見立てではここにある。

そもそも蛙化現象とは何か？ ウィキペディアによれば、「好意を抱いている相手が自分に好意を持っていることが明らかになると、その相手に対して嫌悪感を持つようになる現象」⁸とあり、例として以下のようなものが挙げられている――、

《相手に好きと言われたとき》

《片思いだと思っていた相手から告白されたときです》

《好きだったはずの人が、私への手紙をもって駆け寄ってくる姿をみて「きもっ」となりました》

《相手に好意があることが伝わったのか急に距離感をちぢめてグイグイ迫ってきたり触れてきたり良い所をみせようとしてきたりしたとき》⁹

あるアンケート調査によると、20～50代の約5割もの女性が蛙化現象を経験しており、恋愛カウンセラー・西郷理恵子によれば、主にふたつの特徴――1) 自己肯定感が低い、2) 性的に見られることへの嫌悪感が強い――がみられるという。¹⁰なるほど筆者の身のまわりをみても該当しそうな女性はかなりいる。ただ、はたしてこれが蛙化の真の要因なのかという点、そこはなんとも言えない。内容的にはそうとも言えるが、形式的にはそうとは言えず、蛙化現象の最大の謎である、“なぜ好意（王子）と嫌悪感（カエル）のギャップが生じてしまうのか？”という問いへの説明としては十分とは言えない。

そこで1)と2)をもう少し詳しく見ていくと、まず感じるのが、自分に自信がないという割には、相手に好意を伝えるほどには積極的であることのギャップである。普通に考えて、自己肯定感が低くなるほど好意を伝えるのが難しくなるのではないか。それとも単に自信がない人ほど場違いな行動を取りがちなかだけか。

性的嫌悪にかんしては、その主観的な性質上、共通認識をもつこと自体が難しく、人によって異なる受け止め方をされてきた。近年のハラスメント・リテラシーの普及により、どのような行為が不適切行為に

あたるのかについて判断基準が整備されてきたことは評価に値するが、その一方で、勢い余って度を越えた権利意識や過剰な社会不安に陥るケースもしばしば見受けられる。蛙化現象もそうした事象のひとつに数えられるが、もちろんこうした社会背景だけでは、突然の手のひら返しの構造そのものを説明することはできない。

そこで我々の文脈に戻して検証すると、1)と 2)が説明として物足りないのは、「情念の諸形態」の域を超えていないところにある。この形態だけだと、どうしてもが行為の受動的側面に注意が向いてしまい、能動的側面への配慮を怠ってしまう。性的嫌悪感の説明がまさにそうで、相手への反応（インプット）を注視するあまり、反応が相手にあたえる影響（アウトプット）を見落としてしまう。

こうした偏りをなくすために、能動と受動を等価な概念として使うことをここで提案したい。これらペア概念のメリットは、相互に立場が入れ替わるところにある。キャッチボールの喩えでいくと、投げる側と受ける側は、ボールが行き交うたびに役割を替えないとキャッチボールは続かない。ところが蛙化現象においては、この単純な相互運動ができておらず、ボールを投げ、相手がキャッチし、こちらに投げ返すところまではよいが、そこでパニックを起し関係が途絶える。

それとも、そもそも最初から関係などなかったのだろうか。要はただの片思いで、思いが届いたあとの手のひら返しがことさら注目を集めているだけにすぎないのだろうか。確かにそれはもっともな疑問で、二人の心が通うことがなかったのは事実である。ただ、仮にそうだとすると、それはそれで一種の“関係”をとすることはできないだろうか。

ここで役に立つのがペア概念としての能動性と受動性である。あらためてこの観点から眺めると、甲が乙に好意を持つことと、乙が甲に好意を持たれることは、同じ一つの行為の両側面であり、両思いであろうと片思いであろうとその点において変わりはない。一般的には、甲が乙に好意を持つことと、乙が甲に持つことが同時に満たされることで恋愛関係が生じるとされるが、その一方で、片思いのほうがより“ピュア”な関係と捉える向きもある。究極の能動性である“一途な恋”においては、一途なあまり、相手がこちらをどう見ているかすら見えなくなってしまう。しかも蛙化現象では、相手が一途な恋を返す可能性も示唆されている。そうすると、二つの能動主体がたがいに交叉（両想い？）することなく片思いしあうというシュールな状況になるが、見方によっては、これこそ究極の“純愛”——あるいは、本論の文脈に即せば、究極の等価性——と見ることもできるのではないか。

ここまで論じてきて、やっと思頭で触れたマルクスの価値形態論とラカンの鏡像段階の議論と話がつながる。これらの理論的意義は、それぞれ独自の切り口——価値形態論における「価値」、鏡像段階における「換喩」——から等価性の謎（“たがいに異質なものがなぜ“=”で結ばれるのか？”）を解明するための有力な糸口を示す点にある。冒頭でも述べたように、価値形態論と鏡像段階は親戚関係にあたるが、時系列的には前者が先で、これから見ていくように、「価値」を発展させたものが「換喩」（もしくは「換喩的対象」）となる。まずはラカン自身による説明からはじめる。少し長いですが、概念の基礎固めをするためにもあえてそのまま引用する——、

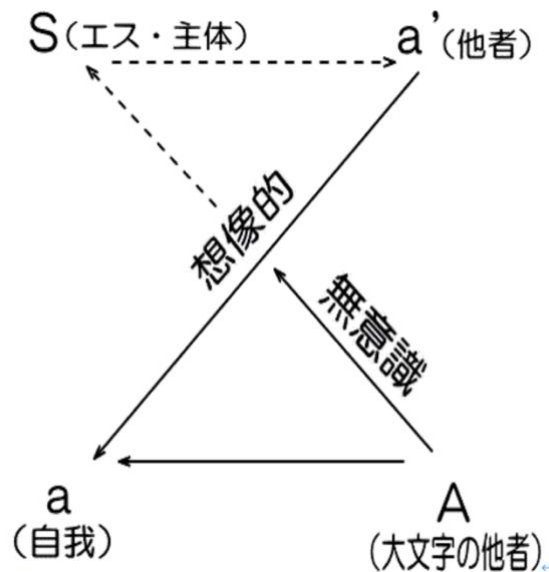
換喩とは、厳密に言えば、我々がそこに人間の言語における原初的かつ本質的な次元、意味の次元に^{センス}対置される次元——つまり、価値の次元——を位置づけなければならないような場所なのです。＜中略＞皆さんには、いわゆる「商品価値の特殊形態理論」の論述のなかのある脚注で、マルクスが鏡像段階の先駆者であることが明らかになっているページを参照していただきたいと思います。

マルクスはこのページで、一般的な等価性があらかじめ打ち立てられることなくしては価値の量的関係も立てられることはできない、という命題を立てています。問題となっているのは、単に、これこれの長さの布地が互いに等しい、ということではありません。構造化されなければならないのは、布地と服の等価性であり、すなわち服が布地の価値を表すことができる、ということです。ですから、もはや、皆さんが身にまとうことのできる服が問題になっているのではなく、服が布地の価値のシニフィアンとなることができる、ということが問題となっているわけです。別の言い方をすれば、分析の最初に必要とされており、価値と呼ばれるものの抛り所となっている等価性は、それにかかわっている二つの項の間で、それらの意味のたいへん多くの部分が放棄されることを前提としているのです。この次元にこそ、換喩的な連りの意味の効果が位置づけられます。¹¹

「服が布地の価値を表すことができる」というのは一見、自明のようだが（“要は、ただの物々交換ではないか？”等々）、実はそうではない。なぜかという、これが可能となるには、等価性が「構造化」されていなければならないからだ。「構造化」とは、「それにかかわっている二つの項の間で、それらの意味のたいへん多くの部分が放棄」、つまり、使用価値が失効することであり、それにより、服はもはや着るためにあるのではなく、布地の価値を表すためにあるようになる。等価性は、二つの項がたがいに異質であることを前提とし、服は、服以外のもの（布地）によってしか自身の価値を表すことができない。これがラカンのいう換喩である。

ただ、ここで注意したいのは、ラカンの換喩の捉え方はちょっと特殊で、服と布地の関係を、一般の換喩の喩え（船と帆）のように、全体と部分の関係として捉えることはできないことだ。そもそも布地（＝部分）が服（＝全体）を表象するのなら、x)「服が布地の価値のシニフィアン」ではなく、y)「布地が服の価値のシニフィアン」となるはずだが、そうはならないのは、x)とy)の一方が部分でもう片方が全体を表しているのではなく、両方とも部分で代替可能な関係にあるからだ。部分が全体を表すというと、二つが一对一で対応しているように思ってしまうがちだが、部分が複数あってもおかしくないし、全体が背後に隠れて見えないこともある。

ここで思い起こすのが、鏡像段階の説明図式として有名なシェーマLである¹²——、



ここにあるのは二つの等価な部分 ($a=a'$) と一つの全体 (A) であり、右下から $a=a'$ を睥睨するように全体 (A) が鎮座している。服と布地は、それぞれ a 、 a' と記号化、略語化されることで、服として、布地としての「意味」を失い、たがいの鏡像に映し出される価値のみが自身のアイデンティティとなる。

部分 a 、 a' が小文字の他者を表す一方で、全体 A は大文字の他者を表す。換喩の関係にあるのは、 a (服) と a' (布地) ではなく、小文字の他者 a 、 a' と大文字の他者 A である。ただ、実際はもっと込み入っていて、布地にしろ、服にしろ、自身を直接表象することはできないため、代わりに自身の鏡像 (布地にとっての服、服にとっての布地) によって代理表象するかたちになる。たとえば「服が布地の価値のシニフィアン」の場合、服が全体の換喩となり、逆に「布地が服の価値のシニフィアン」の場合、布地が全体の換喩となる。重要なので繰り返すと、服と布地は、全体と部分の関係ではない。ならば、全体とは何か。それがよく分からないのである。分からないから他者なのであり、不完全ながらも部分によって表象しようと模索するのである。

その結果、布地を目安に価値化された服が全体の換喩となったとき、服の背後にそびえる全体の威光のおかげで、服が布地以上の価値を帯びる嵩上げが起きる。もちろんこれは自身にも跳ね返ってきて、等価関係が成立する前の片思いのときなど、とくに自分の価値を低く見積もりがちである。むしろ、すべての交換がそうだというわけではなく、カネさえ払えば何でも手に入る状況だと、自分を買いかぶりがちである。とまれ、こうした心理戦が起きるのも、等価の前提があつてのことで、それがなければそもそもズレやブレを感知できない。厳密な意味での不等価とは、交換の不成立である。逆に、厳密な意味での等価とは交換の成立で、それさえできれば不等価な内容でも差し支えない。

そして不等価の極みと呼べるのが、蛙化現象である。先の議論に戻ると、本稿の見立てでは、突然の手のひら返し後も二人の関係は絶たれていない。絶たれているように見えるのは——ここで換喩のロジックが生きてくる——部分と全体をはき違えているからである。事実、元となるグリム童話『かえるの王様』にも示されているように、¹³ 王女が好きなのは王子 (全体) であつて、カエル (部分) ではない。中身は王子でありながら、カエルの心が王女に届かないのは (それどころか、壁に叩きつけられ殺されかける)、ひとえにその醜い (?) 容姿のせいである。

もちろん王子がイケメンに限るのは、彼女の好みというよりは、役柄上の要請にすぎない。なのに、自分だけが美女で、王子は正体を明かさないとするのは不公平ではないか……と王女からすれば納得いかないところだが、そもそも王子がカエルに扮するのは、この童話が寓話でもあるからだ。童話が隠喩のロジックにもとづくとするば（美の隠喩としての王子、王女）、寓話は換喩のロジックにもとづく（部分＝カエル、全体＝王子）。前者は対応関係が明らかだが、後者はそもそも全体が見えておらず、部分（容姿）から全体を推しはかるより手立てがない。帆から船のようなイメージでカエルをイメージしても、王子を思いつくことはできない。

ただ、これは王女に課せられた試練でもある。カエルが身分をわきまえずベッドで同衾を求めたことに腹を立てた王女は、カエルを思いっきり壁に投げつける。するとなぜかそこで魔法が解け、カエルは元の王子に戻る。こうして二人はめでたく結ばれる……こう書いても“どこがいったい試練なのか!?”、と現代人は首をかしげてしまうが、それは昔が不条理に満ちた野蛮な世界だったというよりは、現代が偽善的とはいわないまでも、建前的、コンプラ的になっているからである。せいぜい違いは、後者が“人は見た目が9割”、前者が“人は見た目が10割”程度の差にすぎず、どちらもルッキズムに支配されていることに変わりはない。

しかも見た目が10割といっても、内面が評価されないというのではなく、むしろそのまま筒抜けで外見にあらわれるということであって、王女がカエルを忌み嫌うのは、見た目から中身を正当に判断した結果である。カエルを壁に叩きつけたのも、単にそれ以外にやりようがなかったからであり、実際、そうしなかったらカエルも王子に変身することはなく、ずっと同衾を迫られ続けただろう。要は、王女にとって試練とは、“王子（全体）は美しくあらねばならない”との信念を貫き通すことであり、事実、カエルの甘言に屈することなく、見えない全体への信頼を持ち続けることで、ついに王子が彼女の前にあらわれるのである。

では、そもそもカエルとは何だったのか。王子が美の隠喩なら、カエルは醜の隠喩？と言いたいところだが、それは誤りだ。童話を支える比喩形式はあくまで換喩であり、王子が不在で隠喩が使えなかったために、換喩が代用された経緯を忘れてはならない。隠喩から換喩への移行は、王権の世俗化の一環である。とはいえ、王権自体が否定されたわけではなく、「神は細部に宿る」という言葉にもあるように、「換喩的対象のくず、瓦礫」（48頁）に身をやつすことで世俗化の網目をくぐり抜けてきた。むろん、これを以てすべての細部に神が宿るということにはならないが、細部以外に神は宿らないのもまた事実である。

『かえるの王様』の物語構造を支えるのもこうした当時の共通認識であり、カエルが実は王子様であることに気付かぬ読者はひとりもないと断言できるのは、そもそもグリム童話が属するところの口承説話（メルヒェン）がそういうジャンルだからであり、そこでは、読者はそれまで何度も読み聞かされた話を悦びを以て再確認するよう仕向けられる。新しいものを何より重んじる近代にあって、こうした反復的物語消費はなかなか評価されにくく、事実、口承文芸はその後、近代小説の発展と入れ替わるように衰退してしまっただけで、伝統が途絶えてしまったわけではなく、いまでも子ども向けのおとぎ話や子守唄のなかに連続と受け継がれていることは、フロイトの次の指摘にもあるとおりだ――

子供は、大人が読み聞かせた話や演じた遊戯について、大人がうんざりして断るまで繰り返すことを求め続ける。大人が面白い話を聞かせると、子供は別の話ではなく、まったく同じ話を聞きたがり、反復された話の同一性に頑固なまでに固執する。そして話し手がうっかり話を変えたり、子供を面白がらせようとして筋を変えると、子供はことごとく訂正する。¹⁴

なぜ同じ話でなければならないのか。それは、フロイトによれば態の転換、つまり受け身に話を聞く立場から、能動的に話を再生する立場に換えることで、快がもたらされるからである。立場の転換とは、受動的対象から能動的主体への転換であり、対象と主体は、部分と全体と平行な関係にある。ただそこには難点もあって、上述したように全体が見えないため、能動的主体の構築はきわめて困難であり、できるとしても、対象への働きかけ、つまり“能動的対象”になること以外にない。

こうして王子がカエルの姿に身をやつすのと同じように、主体も対象に依存することになるわけだが、ただそうすると主客転倒どころか、主客循環になってしまい、主体と対象の区別がつかなくなってしまう。カエルが壁に叩きつけられただけの意味不明な理由で王子様に変身してしまうのも、こうした事情からであり、同じグリム童話の『ねむり姫』で、王子様がお姫様にキスをすると100年の眠りから覚めるといったような、いかにも童話的な理由をつけなくとも、物語は成立するのである。それよりも大切なのは、対象と全体、部分と全体がスムーズに循環・往復することであり、不自然な変身に違和感を持ってしまうと物語に入り込めなくなってしまう。それで読者が得をすることはしないのなら、そこは目を瞑って、“こういう物語なんだ”と「同一性の再確認」に徹するほうが、快感原則的であっても賢明な振る舞いではなかろうか。

そしてその結果、何が起きるかという、換喩の逆転、すなわち、部分が全体を表象するだけでなく、それとは逆の、全体が部分まで表象するという事態である。とくに「同一性の再確認」が目的の物語消費においては、見えないはずの全体（結末）が一種の暗黙知として方向づけられているため、それこそイモムシが蝶になるのと同じくらいの確かさをもって読者は読み進めていくことになる。

全体の部分化は、部分の傀儡化でもある。醜いイモムシも、いずれ美しい蝶になることをあらかじめ約束されていれば、それほど卑屈にならずに済む。それこそ良くいえば選ばれし者の密かなプライド、悪くいえば“虎の威を借る狐”の尊大意識を育むかもしれない。

ちなみに「かもしれない」とは言葉の綾で、厳密には、つまりラカン的には、「育むことになる」とより断定調のほうがより正確である。事実、シェーマLをより発展させた、四つの段階からなる「欲望のグラフ」の第一、第二段階のなかで導入された「要求」というラカン独自の概念には、傀儡ならではの尊大さが構造的にビルトインされていて、部分が本来持つべき謙虚さとは裏腹の傾向を併せ持つ。冒頭の誹謗中傷問題ともかかってくるが、5ちゃんやヤフコメ等によくいる「自分の正義を押し付ける系」（ホリエモン）¹⁵がまさにそうで、そこでは正義（全体）とそれを実行することで得られる私的快感（部分）が短絡関係にある。

これからその具体例について論じていくが、その前にラカンの要求概念を押さえておきたい。ラカンの要求概念は一種の（ウィニコットの「移行対象」ならぬ）移行概念であり、これを乗り越えた先に立ちあらわれるのが弁証法の上位概念としての欲望である。逆に、移行がうまくいかない場合、誹謗中傷や蛙化現象といった“症状”となってあらわれる。本稿では、この“なぜうまくいかないのか”を、問いではなく、答え——“うまくいかないようにできている”——として論じていく。もとより答えであるからには問いがあるはずで、筆者はこの問いを橘玲のある著書のタイトルから借用したい——『世界はなぜ地獄になるのか？』¹⁶

もっとも、いきなり要求といわれてもあまりピンとこないだろう。辞書によれば、「当然のこととして強く相手に求める」（コトバンク）とあるが、例文をみても、「賃上げを要求する」、「無理難題を要求する」、

「謝罪要求を拒絶する」等々、ニュース報道や社会派ドラマ以外では耳にしないものばかりだ。英語圏や仏語圏でも事情は似たりよったりで、ラカン自身の説明でも、「要求しているものを与えてくれる人に対してまったく特別の尊大さで振る舞った」り、「恩知らずというありがたい次元を再び生み出し」たり、要求が通ったら通ったで、厚かましくも「さらなる要求を引き起こ」したりと(134頁)、日本とたいして違いはなさそうだ。

ただ、我々がここで注目したいのは、要求の具体的形態というより、形態を背後で支えるメカニズムのほうである。そもそも、なぜ要求は尊大で恩知らずな態度になってしまうのか。ラカンによれば、要求(demand)の第一の役割は、他の二つの概念——欲求(need)、欲望(desire)——を弁証法的に媒介し、動物的な欲求を人間的な欲望に変換することにある。ただ、フレドリック・ジェイムソンの有名な「消えいく媒介者」(“vanishing mediator”)という言葉にもあるように、媒介はみずからの存在を抹消しがちで、一見すると、欲求からそのまま欲望に移行しているように見えがちである。

たとえば、まだ言葉が話せない赤ちゃんが泣いて母親に空腹を伝えようとするとき、泣き声は一種の言語として機能するが、これにかんしては他の動物も同様で、言語が人間固有のレベルに到達するには、欲求をさらに欲望にまで昇華させなければならない——、

フロイトは、苺のケーキを食べることに夢想する幼い娘の幻想を報告している。こうした例は、幻覚による欲望の直接的な満足を示す単純な例(彼女はケーキがほしかった。でももらえなかった。それでケーキの幻想に耽った)などではけっしてない。決定的な特徴は、幼い少女が、むしゃむしゃケーキを食べながら、自分のうれしそうな姿を見て両親がいかに満足しているかに気づいていたということである。苺のケーキを食べるといふ幻想が語っているのでは、両親を満足させ、自分を両親の欲望の対象にするような(両親からもらったケーキを食べることを心から楽しんでいる自分の)アイデンティティを形成しようという、幼い少女の企てである。(傍点筆者)¹⁷

傍点部分にもあるように、欲望は他者(両親)をつねに起点とする。両親が欲するケーキは食べ物としてのケーキというよりは、それをおいしそうに頬張る幼児の隠喩であり、幼児となかば一体になって両親の欲望を刺激する対象となる。欲望主体としての「アイデンティティ」が形成されるには、このように他者の欲望の対象となることが不可欠である。

ただ、いくら「(主体の)欲望は他者の欲望」(ラカン)だからといって、ふたつの欲望が完全に一致するとはかぎらない。むしろ稀だ。しかも不一致で亀裂が生じたら、修復をすべて自分で負担しなければならない。主体と他者は非対称の関係にあり、“(他者の)欲望は主体の欲望”とはならない。そんな理不尽な関係に苛立つ主体が、本来向かうべき欲望の昇華を怠り、そこに充てられるはずの心的エネルギーを他者に向けたらどうなるか。それがほかならぬ要求であり、そこで問われているのは、要求の具体的中身ではなく、他者との権力関係そのものである——、

要求(ドゥマンド)はそれ自体、〈他者〉と非常に深く関係していますから、〈他者〉はすぐに、主体を非難し、はねつけることのできる立場に立つこととなります。(125頁)

なぜ要求は、「〈他者〉と非常に深く関係している」のか。ラカンによれば、要求とは、「ある欲求(プワソン)が、〈他者〉に宛てられたシニフィアンによって伝えられたもの」(124頁)だからである。どういうこ

とか。先の例を続けると、お腹が空いた幼児が泣きじゃくることで空腹を伝えようとするとき、他者はその欲求を——、

認証し、引き受け、認可し、自分の方に引き寄せ、既にそれを承認し始めており、これは本質的な満足をもたらします。要求のメカニズムによって、〈他者〉はその本性上、そうした満足に逆らうものとなります。(125 頁)

前半部分（「……によって、」）と後半部分（「〈他者〉は……」）のギャップに注意してほしい。前半部分の、空腹の「欲求を認証し、引き受け…」、食べ物をあたえることで幼児に「本質的な満足をもたらす」というところまでは分かる。分からないのは後半部分で、どうして「〈他者〉はその本性上、そうした満足に逆らう」のか。要求者の「特別な尊大さ」への反発がそうさせるというなら理解できるが、当の要求者自身も「そうした満足に逆らうことを要請するのだ」と、要求する側、される側のどちらも満足できない「メカニズム」になっているのは、いったいどういうことか。

ラカンはこの点について、次のように説明する——、

さまざまな欲求の体系は、ランガージュの次元に入るとそこで再編成されるわけですが、同時に、シニフィアンの複合のなかに果てしなくはまり込んで行きます。そしてまさにこのことによって、要求は本質的に、その本性上常軌を逸したものになり得るような何かとして措定されるようになるのです。(125～126 頁)

たとえば——、

子供たちが月を要求するのには、それなりの訳があります。子供たちが月を要求するのは、そうすることが、シニフィアンの体系という媒介手段によって表現される欲求の本性に属しているからです。さらにまた我々は、ためらうことなく子供たちにそれを約束します。(126 頁)

つまり要求とは満たされないための要求であり、あえて法外なもの、実現不可能なもの（月）を要求したがるのも、そのためである。

しかしなぜ満たされてはいけないのか。ラカンはこれについて、ある有名な笑い話で説明している——、

「痛めつけてくれ」とマゾヒストはサディストに言います。サディストは答えます——「嫌だね。」(95 頁)

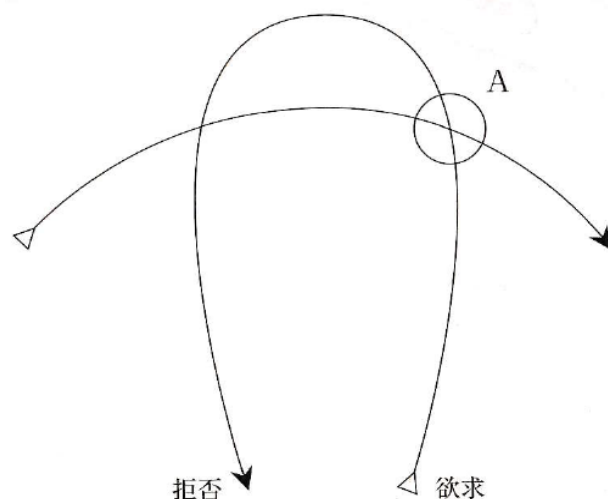
「痛めつけてくれ」と頼まれ、ふつうなら鞭で引っ叩くところを、サディストの役回りじたいを拒否するという、マゾヒストが望むものとは別のかたちで要求に応えるというのが、この話のオチである。もっとも、ドゥルーズの批判によれば、SM とは本来、あらかじめ両者のあいだで取り決められた契約項目を肅々とおこなうものであって、契約事項に反するような事態はそもそも起こり得ない。¹⁸だが、ラカンがここで言おうとしているのは、そうした具体的な事実関係というよりは、むしろ言語の本質——SM のような取り決めがあろうとなかろうと、人が言葉を発するやいなや、「パロール」（「特定の時、特定の場で個人が

具体的に行う言語の使用」コトバンク) が独り歩きしはじめるという事実である——、

人は、語り始めるやいなや、パロールの水準で答えることを余儀なくさせられます。つまり、我々がパロールの水準を通過したことで、何も言わないという条件のもとでならばもっとも深い相互理解に達するに違いないようなものが、私が先ほど拒否の弁証法と呼んだものへと行き着くのです。(95～96頁)

ドゥルーズの批判が的を射たものとなるには、「この何も言わないという条件」が必要であった。もっとも、かりに条件が整ったとしても、ラカンに言わせれば、そんな制度に守られた安全な苦痛など、本当のマゾヒズム——そこでは言葉を話す誰もが「拒否の弁証法」の被虐者である——と比べたら、安っぽい快感にしか見えないだろう。

ところで「拒否の弁証法」とはどのようなメカニズムなのか。ラカンはこれを、「欲望のグラフ」の第一図(96頁)を使って説明している——、



相互に交わる二つの曲線がある。ひとつは、上方の左から右に流れるシニフィアン連鎖の線であり、もうひとつは、右下の「欲求」から、シニフィアン連鎖と二箇所できれい交わり、「拒否」に向かうディスクールの線である。

まず主体のなかに何か得体のしれない衝動が芽生え、これを言葉で表現しようと、「コード」もしくは「意味の貯蔵庫」とも呼ばれる「A」(〈他者〉)に向かって動きだす。この動きに並行して、左の「△」から右の「▲」に向かってシニフィアン連鎖が起こる。この線が最初に交わるのが、すでにAを通過する過程で要求(「痛めつけてくれ」)に変換された主体の欲求であり、「欲望のグラフ」の第二図では、「メッセージ」の頭文字「M」が記される。筆者の理解では、「M」と「A」の違いは、言表行為(エノンシアシオン)と言表内容(エノンセ)の違いとして把握できる。

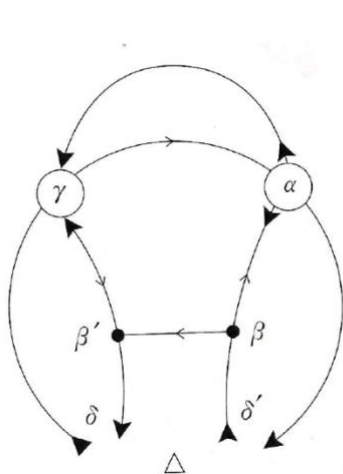
言表内容は話者の意図であり、「痛めつけてくれ」と相手に伝えるとき、彼の念頭にあったのは、鞭でお尻を打たれる等、いかにもマゾ的なイメージである。一方、言表行為は、話者を離れた言葉の独り歩きで

ある。ドゥルーズは、マゾヒストは本気で痛めつけるようなガチのサディストを求めているのではないと批判するが、それは狭義の“プレイ”としてのSMに当てはまるものであって、たとえプレイであっても、言表行為と言表内容にズレが生じてくるのはむしろ自然である（演技で鞭打つ振りをしているだけのサディストが、実は密かにサディスティックな快感を得ている、等々）。

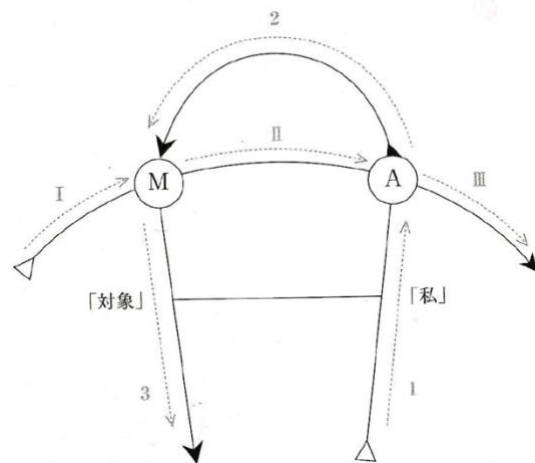
では、ラカンのいう「M」とは何か。それは、言表行為の言表内容に対する優位性（“行動は言葉よりも雄弁”）という「真理」が告げられる場所であり、そこでは当初の欲求が要求を経て、欲望へと到達する。

「苦しみたい」というマゾヒストの欲求は、「痛めつけてくれ」と表現を変えることで要求となるが、そこで言表内容と言表行為に分裂し、前者は要求の次元に残り、後者は別の新たな次元、すなわち「象徴的な秩序」（132頁）に移行する。この秩序は、主体の意向を無視した「さまざまな混乱をもたら」すが、その一つが「嫌だね。」である。

この応答が象徴的といえるのは、マゾヒストが期待していた想像的なもの（鞭打ち）とは別の次元に属すからであり、真理もそこに宿る。では逆に、なぜ想像界に真理は宿らないのか。それは、蛙化現象におけるカエル（フラレた男性）が王女にとって想像上の産物にすぎないのと同じ理由からである。そこで問題となるのは、「対象」（ β' ）と「私」（ β ）との関係である。以下、「欲望のグラフ」の第二図（この図には二つのバージョンがある）を見ていこう――、



第二図 A (14 頁)



第二図 B (129 頁)

これら二つのシェーマは、細かな表記に違いはあるが、基本同じものとみなしてよい。セミナー『無意識の形成物』の最初のほうに出てくるのが左図で、のちに右図に変更し、以後そのままとなる。どちらにしても、「欲望のグラフ」第一図との大きな違いは、「対象」（ β' ）と「私」（ β ）の追加であり、これらが示すのは第一図の短絡化、簡易化である。右図で示すと、本来ならディスクールの線が「 Δ 」からスタートし、シニフィアンと交差しつつ、「1」「2」「3」と進み「 \blacktriangle 」に到達するところを、第二図では「A」も「M」も通らず、「対象」（ β' ）と「私」（ β ）のあいだをグルグル回るだけである。その結果――、

たいていは、いかなる真理も告げられることはありません。それは、ほとんどの場合、ディスクールが絶対にシニフィアン連鎖を横切るということがなく、単なるくり返しやおしゃべりで、 β と β' の間の短絡路を通るから、という単純な理由によります。ディスクールは、この私が話す動物であると

いうことを皆さんに知らせる以外には、まったく何も言いません。それは共通のディスコースで、何も言わないための言葉からできています。人はこのディスコースのおかげで、自分は単に、自然のままの人間と、つまり獐猛な野獣と向き合っているのではない、ということを確認しているのです。(15頁)

「私」が「話す動物」にすぎないのは、「何も言わないための言葉」しかしゃべれないからである。ただこれにはひとつ盲点があって、話す目的が、「獐猛な野獣」ではないことを単に示すだけなら、「話す動物」である点では同じカエルと王子様の違いを見分けることはできなくなる。王女にできることはせいぜい外見で判断するだけであり、当然、真実を見誤る。

(ドゥルーズ的な意味での) マゾヒストについても同様で、マゾヒストにとってサディストは命令に忠実にしたがうだけの道具(「話す動物」)にすぎず、両者は人間的(=象徴的)関係にはない。マゾヒズムの快感の源泉はひとえに、どれほど行為が残忍に見えようとあくまでプレイにすぎず、心身の傷を負うことは絶対ない、という保障と安心感にある。ただ、これは裏を返せば、それほどまでに他者(野獣)の不可解さ(獐猛)への不安に支配されているということでもあって、そんな状態で〈他者〉と向き合うことでしか見えない真理を獲得できるはずがない。

心の支配は、蛙化現象やマゾヒズムだけにとどまらない。ラカンの第二図はすべての人間に潜在的にあてはまる傾向を示したもので、事実、ふだんのコミュニケーションのほとんどが「単なるくり返しやおしゃべり」であることは、心理学的知見——一例としてメラビアンの法則によれば、「言語情報 7%」「聴覚情報 38%」「視覚情報 55%」だという¹⁹——にとくに頼らなくとも、我が身を振り返ればすぐに分かることだ。

ただ、言語情報が 7%といっても、聴覚情報と視覚情報もそれなりに言語化(記号化)されているので、いちがいに区別できない。「単なるくり返しやおしゃべり」であっても、言語コミュニケーションであることに変わりはない。そのうえで、あえて聴覚情報と視覚情報にかんして動物との違いをみつけると、ヒトが熊に遭遇した際の危険信号(“逃げろ!”)と、シマウマがライオンに遭遇した際の危険信号(“ワンワン” ※シマウマの鳴き声は犬の鳴き声と似ている)はおそらく同じものだが、ヒトの場合、信号に加え、ときに相反する別のイメージ=意味も付加される。くまのプーさんやテディベアしかイメージできない人にとって、「獐猛な野獣と向き合っている」認識はなかなかもてないだろうし、YouTube 動画などでペット化した熊が飼い主とじゃれ合っている姿を見てばかりいると、そちらのほうが本当の熊のように思えてしまう。

なぜそのように思ってしまうのか。いや、そう思いたいのか。その答えとなるのが、「対象」(β')と「私」(β)の二者関係である。当然といえば当然だが、ヒト(「私」)が誰かを模倣するとき、自分を捕食するような相手をわざわざ選んだりもしない。選ぶのはむしろ、「私」を味方、つまり善人として選んでくれた同朋たち(母、兄妹、友人)であり、彼らからの好意のまなざしに見つめ返すことで結ばれるのが、互いを鏡像として見つめ合う二者関係である。そこでは善と安全・安心が等価であり、身を脅かす危険=悪は回路から排除される。その意味では一種のお花畑だが、一方で、そこは真理の宿る場所ではなく、安心にしる善にしる、ただの幻影にすぎないのは、すでに述べた通りである。

ところで、このお花畑に入るには一つ条件がある。それは「A」(〈他者〉)を全面的に受け入れることであり、「特別な尊大さ」という要求者の特徴もここに由来する。ラカンが着目するのは、要求の語源である――、

要求とはもともと「demandare」、つまり信じて身をゆだねる *se confier* ということでした。(135 頁)

つまり、主体は〈他者〉という絶対的権威に「身をゆだねる」ことではじめて、要求者というアイデンティティを獲得するのであり、要求される側（「対象」(β')、小文字の他者)も、要求者の背後に大文字の他者の意向を感じ取ったからこそ、理不尽な要求にもあえて真摯に向き合うのである。

こうした〈他者〉への“付度”を、当然ながら要求者は悪用する。その一例として、ラカンがフロイトの機知論に出てくるある逸話を挙げている。お金に困っていた男にお金を貸したところ、男はそのお金で当時贅沢品とされていたマヨネーズをかけた鮭を食べてしまった。怒った男性は、「私が借したお金をそんなことのために使ったんですか」。男はこう答える――、

「おっしゃることがわかりません。お金がなかったら鮭のマヨネーズ添えは食べることはできないし、お金があるときは食べてはならない。じゃあ、いったいいつ鮭のマヨネーズ添えを食べろと言うんですか」。²⁰

普通の神経の持ち主であれば、ひと様から借りたお金で贅沢に耽るなどもつてのほかと、清貧に甘んじるべきところを、この男はむしろそういうお金だからこそ、惜しみなく贅を凝らそうとするのである。

なぜわざわざそんな恩知らずなことをするのか。それは、〈他者〉の名において相手を試すためであり、以下の二択――要求を受け入れることで、「対象」(β')と「私」(β)の閉じた迂回路の道連れとなるのか（たとえば女性の場合、“ダブルヒロイン”）、それとも要求を拒むことで、SMの笑い話が示すように、マゾヒストの要求を「M」(真理)のレベルで意表を突くかたち（「嫌だね。」）で叶えるのか――のいずれかを迫るのである。

サーモンの逸話では、貸主がどちらの道を選択したのかは不明だが、それとなく後者を仄めかしているようにも見える。ただ、「嫌だね。」と同じ真理の高みにまで達しているかということ、それは疑わしい。むしろフロイトのいう機知、すなわち「シニフィアンの行使それ自体の快感」(130 頁)に照準を合わせていると見るべきではなからうか。フロイト的機知をひとことでいえば、意味(シニフィエ)の剥奪であり、フロイトの注釈にあるように、逸話から機知の要素をなくすと、ただの嫌味な「シニシズム」でしかなくなる――、

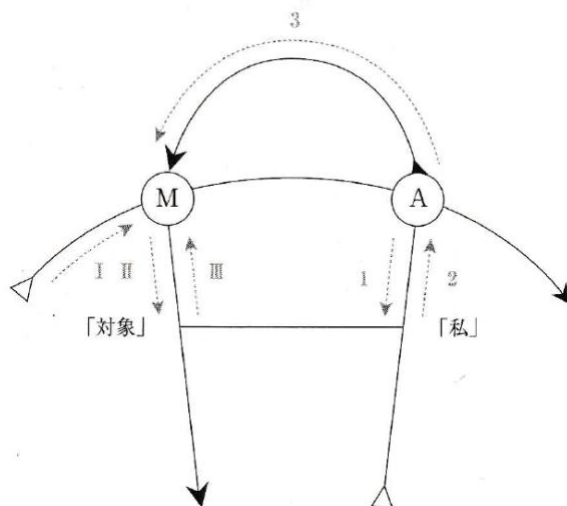
私はおいしいものに目がなくて、どこからその金を工面するかはどうでもいいんです。これが、あなたに金を借りたその日に、こうやって鮭のマヨネーズ添えを食べている理由です。(58 頁)

我々は機知と意味の落差のなかに、要求の限界を見てとることができる。要求の本質は、叶えられても満たされないところにあり、「聞き入れられた要求」が「つねにさらなる要求を引き起こす」ことが永遠に続くことが、「要求の正常なメカニズム」(134 頁)である。要求者にとって一番困るのは、要求が通らないことではなく、要求の連鎖が絶たれることである。なので、そうならないよう要求者は――、

要求を偽装します。主体は何か必要なものを要求するとき、自分が必要とすることもあるような、要求の口実としてはいっそう受け入れやすい、別のものの名のもとに要求します。必要に応じて、そう

した別のものがないときにはこれをでっちあげるでしょうし、とりわけ、要求を表明する場合には、〈他者〉の体系がどんなものかを考慮することでしょう。(135 頁)

こうして鮭のマヨネーズ添えが NG なら、次回はより「受け入れやすい」別の料理を注文するなりして要求活動を維持しようと努めるわけだが、こうした譲歩という名の〈他者〉への配慮は、いつしか要求そのものを根底から変えてしまう。それが〈他者〉への要求から〈他者〉の欲望への変容であり、前者の主語が主体なら、後者の主語は厳密には〈他者〉になる。これを「欲望のグラフ」第二図 C で説明すると――。



第二図 C (137 頁)

二つある「三つの時 (タン)」のアラビア数字のほう (1, 2, 3) を見てほしい。第二図 B では右下の△から始まるところが、この図では途中の「A」から始まっているが、それはどこを起点にするかによってその後の推移が異なってくるからだ。B の起点 (「意図=志向 (アンタンション)」129 頁) では、ヒトはまだ主体化されておらず、ただの動物的欲求の塊である。一方、C の起点「A」では、すでに〈他者〉の介入により欲求から要求に変容している。ちなみに私が「」で括られているのは(136 頁)、「私」が文章上 (言表内容) の主語になっているからで、言語の性質上、そこに生物学的欲求 (お腹がゴロゴロ、体内分泌、等) は含まれない。

次の、要求から欲望へのさらなる変容は、主体と〈他者〉の二者関係から、主体と対象 (小文字の他者) と第三者 (= 〈他者〉) の三者関係への移行でもあり、フロイトはこの違いを滑稽と機知の違いとして説明している。要は、“誰が笑う立場にいるのか?” の違いであり、鮭のマヨネーズ添えが機知にカテゴライズされるのは、二人の登場人物は笑う立場になく (どちらにとっても不愉快な出来事である)、笑い話として消費する読者 (= 〈他者〉) だけが笑える立場にいるためである。逆に、滑稽では、おかしい人物が目の前に一人いるだけで成立する。たとえば、ものまねでは通常、観客 (「私」) の目の前に演者 (コロッケ) が一人 (コンビの場合、二人) いればじゅうぶんである。ただその際、ものまねする対象 (美川憲一) への悪意がないことが絶対条件となる。

フロイトは、滑稽のメカニズムを経済論的に説明している。すなわち、等身大の対象と誇張された対象の差分のエネルギーが宙に浮き、浮いた分を笑いのエネルギーに転換、消費するというものである――、

他者の動作が過剰で不合理なものである場合、それを理解するのに要する私の過大な心的消費は、《発展途上》で、いわば動員のさなかに制止されてしまい、余計なものだとみなされ、別の用途に、場合によっては笑いによる放散に、自由にあてがわれることになる。〈中略〉快の発生とはすなわち、自分の動作と比較した場合に余剰となって活用できなくなってしまう神経支配の消費のことなのである。(230頁)

経済論は等価性の原理に基づいたものの見方であり、また、それがあつての二者関係である。問題はどちらの側に余剰が生まれるかである。通常だと、「他者の動作が過剰で不合理なものである場合」とあるように対象の側だが、コロッケのものまねでは、主体であるコロッケの形態模写から余剰を生み出すことで、滑稽を機知に変え、悪意を感じさせない効果を生んでいる。

彼の評価を決定づけたコントといえば、美川憲一とのサプライズ共演である。その場にはいないことをよいことに、美川の癖を散々デフォルメしてやりたい放題のコロッケの背後に突如、本物の美川があらわれる。気づいたコロッケは大慌て、ひたすら平謝りするが、美川は大目に見てくれ、最後は仲良くデュエットで幕を閉じる。ポイントは、最後のシーンではなく、その前の平謝りするシーンである。そもそもなぜコロッケが平謝りするのかというと、彼に悪意の自覚があつた(とされる)からだが、本当のところはどうか。むしろ平謝りすることで、悪意があつたかのように見せているだけではないか。

ここで重要となるのが視聴者の存在である。というのも、視聴者がそこに証人として居合わせなければ最後の和解は起きなかつたはずだからである。美川が許してあげたのは、視聴者がそれを心から望んでいるからであり、しかもなぜ望んだかということ、そちらのほうがより楽しめる視聴者なりに判断したからである。

二者関係と三者関係の違いをあらためて整理してみよう。どちらともベースとなるのは二者関係 1+1 で、これに 1 を加えたのが三者関係(1+1)+1 である。これらをコロッケのものまねにあてはめると、サプライズなしのものまねは 1+1 (視聴者+コロッケ)、サプライズありのものまねは(1+1)+1 (コロッケ+美川憲一)+視聴者)となる。二者関係を構築するそもそもの目的は、等価と不等価の選別であり、「動作が過剰で不合理」な場合は不等価とみなされる。コロッケのサプライズなしのモノマネでは、動作のなかに等価(普段のコロッケ)と不等価(美川のものまね)のギャップが生まれたときに笑いが生じる。二つのものまねは、敵と味方の選別の違いでもある。味方の選別(視聴者→コロッケ)では、笑いで差分を埋めることで等価関係を作るのに対し、敵の選別(コロッケ→美川)では、誇張で差分を拡げることで等価関係を破壊する。

滑稽の二者関係は、なにより立場の違い(能動=笑う人、受動=笑われる人)としてあらわれる。SMのような事前の取り決めがない場合、独りよがりの笑いで相手を傷つけるリスクが常にある。昨今の人権意識が高まるなか、滑稽にかぎらず、一対一の対面コミュニケーションはだんだん忌避される傾向にあり、相手のちょっとしたしぐさをイジって、パワハラで訴えられるケースもある。事前に入念な打ち合わせをしておけばマジギレされるような事態にはならないだろうが、なかには相手の了解を得ぬまま強行突破し、「禁止令」が出されたケースもある。

そうしたリスクの解消とはいかないまでも、軽減させる効果をもつのが三者関係における第三者(他者)であり、二者の利害関係から距離を置くことで、笑いの攻撃性を軽減させる。デフォルメされた美川憲一に腹を抱えて笑う視聴者に悪意がまったくないとは言い切れないが、二者関係の当事者たちとの利害関係がないため、コロッケの肩を持つように見えて、笑い以外の利益にあずかることはない。同じくサーモン

のマヨネーズ添えの機知においても、読者はコケにされた貸主に同情して然るべきところだが、実際にはそういうことはなく、噛み合わない会話（「方向を逸らして答える」57頁）の妙を楽しむだけである。

ここで前述の換喩の話とつながる。フロイトは機知の特徴（「技法」）を「心的力点のずらし〔遷移〕」（57頁）と表現するが、これを修辞学的に発展させたのが換喩である。（「フロイトが置き換えと呼んでいるものが換喩にあたります」109頁）。本稿では、「部分が全体を表象する」という換喩の従来の定義に若干補足を加え、「部分が（見えない）全体を表象する」という定義のもと、これまで論じてきた。ほんらいなら部分が全体との一対一の対応関係を築けるところが、全体を見失い、向きを他の部分に向けたのが、遷移のメカニズムである（シェーマLの $a \rightarrow a'$ ）。

たとえば、サーモンの機知では“テーマ”が部分として機能しており、「当初のテーマとは別のテーマに遷移する」（58頁）工程がそこに見て取れる。当初のテーマは“貧乏人”（“お金に困った男が男性からお金を借りる”）であり、新たなテーマは“金持ち”（“おいしいものに目がない男が高価な食べ物を食べる”）である。貸した側からすれば、まったくもってふざけた話だが、男が意に介さないのは——ここが換喩＝遷移のねじれたところだが——男の思惑を超えた次元で、機知の無意識の意向が、貸した男性ではなく見えない全体に向けられているためである。

「欲望のグラフ」第二図Aでは「 α 」＝「コード」（象徴界、言語システム、価値体系）、BとCでは「A」＝〈他者〉が、見えない全体にあたる。全体を全体たらしめる条件は、コードや〈他者〉が複数存在してはならないことである。上述の布と服の喩えからも窺えるように、部分がたがいにとれほど異質であっても、全体は一つである。それは〈他者〉＝「コード」（象徴界、言語システム、価値体系）が定義上、一つしかないからであり、この基盤がなければ遷移はできない。サーモンの例における二つのテーマ（“貧乏人”、“金持ち”）の間のギャップから機知が生じるのも、笑う側の頭のなかで二つを包む全体が一つとされているからである。これが複数になってしまうと別々の話を羅列しただけになり、機知は生じない。

では、何が一つの全体と二つの部分＝テーマを結びつけるのか。それが、ほかならぬ等価性である。服と布地が同じ価値（値段）を持つかぎり交換可能なように、“お金に困る”と“高価な食べ物を食べる”も、テーマの内容は真逆でも、テーマの形式、つまり、等価な対象（「心的力点」）という点では同じである。対象のアイデンティティを支えるのは意味の不在であり、不在の穴を埋めるのが価値である。

身近な喩えでいくと、筆者は最近、株式投資をはじめた。当初はメガバンクや大手商社といった素人にも馴染みのある大型株ばかり購入していたが、徐々に知らない銘柄にも目を向けるようになった。株を勉強していくにつれ、イメージよりも様々な数値（財務諸表、チャート、PBR）を重視するようになった。株取引は買いと売りの二段階からなり（例：1,000円で買った株を1,500円で売る）、その都度、株券が売主と買主のあいだで交換される。収益は、二回の等価交換の差分によってもたらされる。その際、二つの株価（部分）の差分を一種の空間移動として捉えたのが遷移であり、さらに主要銘柄を平均化したのが、日経平均など市場相場といった全体である。個別の株式が部分にあたるとすれば、全体にあたるのが相場である。相場はつねに流動的だが、複数に分裂することはない。東京市場、NY市場、ロンドン市場と複数あっても、株式（部分）を上場できる市場（全体）は一つである。

これをサーモンの話につなげると、市場にあたるものが、非当事者の読者から成る〈他者〉である。ただし、〈他者〉と個人の読者はまったく同じというわけではない——、

機知が存在するためには第三者たる〈他者〉がいなければなりません。第三者たる〈他者〉の認可は、

ある個人によって支えられていようといまいと、ここでは本質的なものです。〈他者〉は、ボールを投げ返し、メッセージを機知としてコードのなかに整理し、コードのなかでこう言います——「これは機知である」と。(26 頁)

〈他者〉と個人の違いは、端的に言って許認の有無にある。話のオチに読者が笑った時点で機知とみなされるのではなく、〈他者〉の「認可」を受けて読者は笑うのである。なぜそのような手続きをとるのかというと、滑稽と違って機知にはある種の公共性があり、誰が聞いてもおかしいという確信がないと笑えないからである。

むろん笑いのツボは人それぞれで、十人中十人が笑う保証はない。ただ、ラカンのいう〈他者〉は、そうした個人の総体から成る“集団的無意識”のようなものではなく、日経平均が一つの相場であるのと同じ意味で、「一個の〈他者〉」(14 頁)である。一個の〈他者〉とは、一つの「コード」であり、“この機知は誰もが笑える”と断言できるのは、例えるなら、英語論文のネイティブチェックのようなもので、どれほど文章に自信があっても、ネイティブから「英語として不自然」と言われたらミスを正すのと同じ理由である。

一方、こうした全知全能の〈他者〉と逆の立場にいるのが、個人としての「自我」である——

機知工作が功を奏したかどうかの判定は、冗談の場合には、他人に委ねられているように見え、それはあたかも自我がそれについての自分の判断を確信できないかのようである。(171 頁)

なぜ「確信できない」のか。それは、自我が〈他者〉から疎外されているからであり、そもそも他者の定義からして、自我と“異なるもの(他なるもの)”だ。「欲望のグラフ」の第二図 C に照らすと、起点は〈他者〉であり、自我(「私」)はあくまで参考意見として自身の「要求」(136 頁)を述べているにすぎない(「この定式化は〈他者〉から発している限りで、そもそもの初めから疎外されており・・・」137 頁)。「要求の口実としてはいっそう受け入れやすい、別のものの名」、つまり〈他者〉「のもとに要求」(135 頁)するのもそのため、こうした要求の「偽装」を通じ、自我は〈他者〉からの“配慮”に“忖度”をもって応じるわけである。

配慮と忖度を通じて得られた合意は、三番目の「時」(タン)としてメッセージ(M)に結実する。そのとき〈他者〉は影をひそめ、「私」が前面に出る——「私が自分で機知として認めたものだけが機知である」。(144 頁)腹を抱えて笑うには、「本質的な主体性 [=主観性]」が必要となる。人は客観的に笑うことなどできないからだ。とはいえ、そうした主体性も、もとはといえば客観性の支配下におかれた(“subject to”)主体性であり、そこを見誤ると“場違いな笑い”や“不適切な笑い”の烙印を押されてしまい、最悪の場合、コンプラ違反にかけられてしまう。その際、それを判断、認定する“主体”は、もちろん内なる〈他者〉である。

紙幅も尽きてきたので、そろそろ締めくくろう。冒頭の誹謗中傷問題に再度、話を戻すと、誹謗中傷をする側とされる側のコスパの不均衡が問題解決を困難にしていると、成田悠輔は正当にも指摘するが、そう言われてもこちらとしては、「そうですよね。難しいですよね」と頷くしかない。不都合な真実を知るとは悪いことではないが、あとに残るのは無力感と思考停止である。成田はそれを望んでいるのだろうか。

筆者の試みは、成田の考えを否定することではない。むしろその徹底であり、その結果、かりに「生き

延びられなかった」²¹としても、そのとき初めて見える、いわば精神分析版ミネルヴァの鼻としてのフロイト・ラカンの知見（要求、機知、滑稽、他者、自我）こそが、今日のコンプラで充満した社会への対抗概念として活かされるべきではないかと思うのである。

誹謗中傷をする側とされる側の関係を機知の文脈に置き換えると、そもそも両者が二者関係（滑稽）にあるのかどうかも疑わしい。メディアは、この種の事案が起こると決まって安易な二者関係の図式に落とし込むが、そこで見落としがちなのが、誹謗中傷する側（「私」）と〈他者〉がときに入れ替わるという、三者関係に起因する公私混同である。

ヤフコメのような、プラットフォーム自体が公私混同を助長するメディアではとくにこれが著しく、ホリエモンという「自分の正義を押し付ける系の人」を大量に産む土壌となっている。ほんらい正義は公の価値観であって、勝手に私物化、私人化はできないはずだが、当人たちはいたって本気、そして平気である。その道の専門家でもないのに（しかも無名、匿名）、どうしてそんな偉そうな態度ができるのか。冷静に考えると不思議だし、ネット以外では起こりえない話だが、本人たちからすれば、正義は一つで、公私の区別を付けるべきではないというのだろうか。とはいえラカンのには、〈他者〉と「私」はまったく別物で、これらはそれぞれ客観性＝対象性と「主体性 [=主観性]」の指標となっている。

この区別を先鋭化させたのが機知と換喩である――、

機知にはそもそも個別的な機知しかないからです――抽象的な空間には、機知は存在しません。(4 頁)

ラカンのこの説明は、部分＝換喩についてもあてはまる。対象は「換喩的对象」でもあり、換喩＝部分として〈他者〉＝全体を象徴することで間接的に客観性を担保する。ただ、すべての混乱の元もそこにあって、客観性（〈他者〉）と主観性（「私」）の混同が起きるのも、もとはといえばこの構造にある。

これは誹謗中傷される側からすれば、二重の意味でふざけたロジックである。第一に、勝手に許可なく対象に仕立てられ、換喩＝部分として〈他者〉＝全体を象徴させられるのはよいとしても、全体だからよいとは限らない。そもそも〈他者〉はその定義上、表象不可能であり、善悪の彼岸にある。〈他者〉の側からすれば、〈他者〉の存在証明は対象の表象如何にかかっている。ところが、対象＝誹謗中傷される側もまた自身を表象することは不可能で、「欲望のグラフ」第二図 B, C から窺えるように、表象行為ができるのは、対象と等価関係を結ぶ「私」のほうである。

他方、「私」は「私」で、客観性という〈他者〉のお墨付きがないと、対象を提示することはできない。そこでなんとか自前の〈他者〉を駆り出そうとするわけだが、その際、〈他者〉のある弱み（強み？）につけ込む。それは、「私」よりも〈他者〉のほうが、対象を笑いものにすることで得られる快感が大きいという心理学的事実である――、

機知の作者よりも第三の人物に対してこそ、機知の与える快はより顕著である。(163 頁)

なぜこのような差が生じてしまうのか。これについてフロイトからの明確な説明はないが、答えはある意味、自明である。芸人と視聴者のどちらのほうもものまねをより楽しめるかは、あらためて聞くまでもないだろう。もちろん視聴者だ。

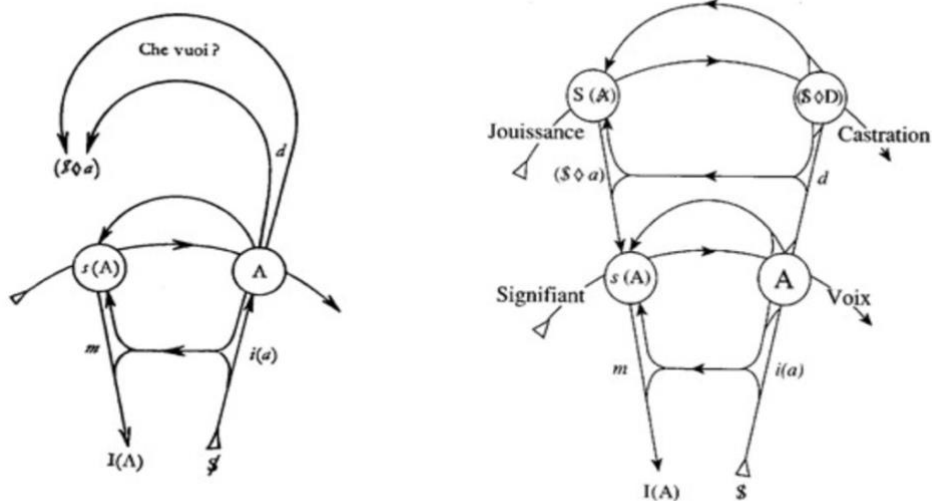
視聴者としてお笑い番組に臨むとき、「私」は名前をもった一人称の人間としてではなく、〈他者〉の代理（第三者）として、笑いの承認をあたえるために芸人と向き合っている。最近流行りのネットスラング

を借りれば、「私」はまさに大文字の他者の名において「主語がデカイ（大きい）」。「当然、笑い声も大きくなる。ただ、分をわきまえず、度を越えた私物化、私人化に走ってしまうと、辞書にもあるように、「本来は自分だけの意見であるはずのことを、さも大勢が主張しているように言い換え」、「『私はこうである』の主語『私』を、『世間』『日本人』のように規模を大きくして」しまう（大辞泉）。

「私」の大文字の他者化が進む一方で、気になるのが小文字の他者としての「対象」の行方である。「欲望のグラフ」第二図 B,C が示すように、「対象」は「私」と等価関係にある。「私」の「主語がデカ」くなることで価値のインフレが起き、それに応じて「対象」も同様のインフレを起こす。美川憲一の例がまさにそうで、デフォルメされたしぐさと視聴者の肥大化した自我は相関関係にある。

ものまねでは、悪意を除去するフィルターがかけられているが、ネット空間では、むしろ悪意を増幅するブースターがかけられている。当該人物の名前や出身校の特定、魚拓やスクショなど、それ自体としてはどうということもない中立的情報が、フィルターを通ることで悪意に紐づけされる。その結果、子どもの頃のあどけない写真ですら邪悪なオーラに包まれてしまうわけだが、そうして仕立てあげられたモンスターの鏡像の双子のモデルが、モンスターに仕立てた張本人である「私」（ネット民）であることを我々はいよいよ忘れがちなのは、それが我々にとって不都合な真実であるからであることは、あらためて言うまでもあるまい。

もっとも、“言うまでもない” という指摘がさらなる忖度となって「欲望のグラフ」の循環を促進するだけだとしたら、それはそれで、それこそ成田でなくとも、「ちょっとやそつとで解決するのは難しいんじゃないかな」と、弱音を吐きもなろうというものだ。そうならないためにも、「欲望のグラフ」第二図のステージに滞留せず、第三図、第四図への視野を広げていくべきというのがラカンからの提案だが、紙面も尽きたので、ここでは図式を提示するに留め、別の機会にあらためて論じたい。



註

1. 死亡日：2023/07/12 以下のネット記事を参照のこと。青沼陽一郎「ryuchell 自殺、日本はなぜこれほど若者が生きづらい国になったのか」、JBpress <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/76067>(参照:2023-11-24)。
2. 「成田悠輔氏、誹謗中傷問題に『する側とされる側のコストの大きさの違いが根本原因』」、「スポニチ Sponichi Annex」

<https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2023/07/16/kiji/20230716s00041000275000c.html?fbclid=IwA>

- [R20irSUBHcWyFqZT6VCm1Dgg9MTHE1XH1CJ9Ioh_lhL7pUesvbwkhYaRyY](#) (参照:2023-11-24)。
3. 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』41頁、1999年、講談社。
 4. 同上、42頁。
 5. 同上。
 6. 「著者インタビュー いま小倉千加子が考えていること」、「集英社新書プラス」<https://shinsho-plus.shueisha.co.jp/interview/%E5%B0%8F%E5%80%89%E5%8D%83%E5%8A%A0%E5%AD%90%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%93%E3%83%A5%E3%83%BC/8817> (参照:2023-11-24)。
 7. 柄谷行人『マルクスその可能性の中心』44頁。
 8. 「蛙化現象」、「ウィキペディア」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%9B%99%E5%8C%96%E7%8F%BE%E8%B1%A1> (参照：2023-11-24)。
 9. 「アンケート調査が語る『蛙化現象が起きたとき』100年の恋も一瞬で冷ます男の言動とは?」、「FRIDAY DIGITAL」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/aebbacabd1011bb0c6af9fe212bb77b93d65efce> (参照:2023-11-24)。
 10. 同上。
 11. ジャック・ラカン『無意識の形成物』上、115～116頁、ジャック＝アラン・ミレール編、佐々木孝次他訳、2005年、岩波書店。以下、頁数は本文中に記載する。
 12. 清田友則「“共感力”という名の悪魔のささやき——ラカンの『シエーマL』から紐解くフロイトの超自我とその今日的諸問題」、横浜国立大学教育学部紀要.II, 人文科学、巻2, p.1～22、2019年。
<https://ynu.repo.nii.ac.jp/records/9627> (参照:2023-12-11)
 13. 「かえるの王様、あるいは鉄のハインリヒ」、「グリム童話」
https://www.grimmstories.com/ja/grimm_dowa/kaeru_no_osama (参照:2023-11-24)。
 14. ジークムント・フロイト「快感原則の彼岸」、『自我論集』、158頁。竹田青嗣編、中山元訳、2005年、筑摩書房。
 15. 堀江貴文 ホリエモン「ryuchellさんが亡くなられたことについて」
<https://www.youtube.com/watch?v=SraDbiNW-Qc> (参照:2023-11-24)。
 16. 橘玲『世界はなぜ地獄になるのか?』、2023年、小学館。
 17. スラヴォイ・ジジェク『ラカンはこう読め!』、89～90頁、2008年、紀伊國屋書店。
 18. ジル・ドゥルーズ『マゾッホとサド』、51～52頁、蓮實重彦訳、1989年、晶文社。
 19. 「メラビアンの方則」、「ウィキペディア」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%83%A9%E3%83%93%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%81%AE%E6%B3%95%E5%89%87> (参照:2023-12-11)。
 20. フロイト『機知——その無意識との関係』、『フロイト全集8』、56頁、中岡成文他訳、2008年、岩波書店。以下、頁数は本文中に記載する。
 21. 清田友則「生き延びられなかったときのためのラカン：『欲望のグラフ』、『主人のディスクール』から紐解く自我の理想化とその末路」、横浜国立大学教育学部紀要.II, 人文科学、巻5, p.1～16、2022年。
<https://ynu.repo.nii.ac.jp/records/11650> (参照:2023-12-11)。
 22. 左が第三図、右が第四図、図式は以下のサイトから借用した。Norbert Bon, “près des remparts de séville”
<https://www.freud-lacan.com/getpagedocument/29481> (参照:2023-12-11)。